

中心化の問題

大多和 明彦

(平成9年10月2日受理)

Die Frage über Zentralisation

Akihiko OTAWA

(Received on October 2, 1997)

序) 本論の意図

「中心化」とここで言うのは、有るものがそれに依存して有り得ているその存在可能根拠を何らかの形で設定しようとする態度を意味している。その際この根拠は、もちろんもはや他の何ものにも依存せずに、自ら存立するものと考えられる。即ちそれは自性者である。

本論はこのような自性者がどのような形で設定されているかを、創世記やプラトンの思想、さらにギリシャ神話やバラモン教またゾロアスター教において具体的に試み、その際ピタゴラスの考えにもいささかふれている。

それらはすべていわゆるアリア系思想の古層である。アリアとはいうまでもなく「高貴」を意味している。自らを「高貴」とする人は、世界の中心的自性者を設定し、それへの最接近という特権的ポジションに着こうとした。

私はこのような態度から去りたいと思う。本論はその去るべき境域を見定め、出発(たびだち)を準備しておくとするものである。

1) ミレトス学派の基本的態度

前6世紀の中ごろアテネの対岸ミレトスの地に、「世界の原質」(アルケー)なるものを求めて思索する一群の人々が現れた。おおよそ200年後にアリストテレスによって「哲学的探求の草分け」と呼ばれるようになるタレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスである。

この三者の間には若干の思想表現の違いはあるが、その考える姿勢・思考態度とでもいうべきものは全く同一であった。即ち、彼らはこぞって、それまで支配的であっ

た神話的思考態度に批判の旗を掲げたのである。脱神話化・Entzauberungとしばしば呼ばれる態度が、彼らによって初めて文献上に記録され出した。

彼らの批判の射程は実はその原理からして、単に当時のギリシャ神話の否定には留まらず、彼ら以降のヨーロッパ形而上学全体の批判にまで及ぶことになる。というのも、彼らがアンチの旗を掲げた神話的思考態度とはそもそも、世界(有るものの全体)が有り得ているその根本原因=存在可能根拠を何らかの形で設定しようとする態度であり、ヨーロッパ形而上学は、もちろん神話から遠く離れはしたが、それでも常にこの根本原因を設定するという態度を堅持し続けたからである。

そのさい根本原因は、他のものにいっさい依存しない独立的自性的なものでなければならなかった。というのももしそれがさらに他の何ものかに依存するとすれば、それは「根本」原因とはもはや言うことができないからである。神話から形而上学にまで至るヨーロッパの支配的思考態度は、この自性的な根本原因の視点から世界を統一的に見届けようとし続けたのである。ミレトス学派はこの態度そのものに反対した。

もちろんギリシャ神話においては、そのような中心点に設定されるのはゼウスである。世界(有るものの全体)を三角錐として例示するならば、ゼウスはこの三角錐の頂点に位置している。そして後述するように世界の出来事は、ゼウスに由来する多くの神々の引き起こすきわめて人間的な振る舞いによって統裁されると見なされる。

そこでミレトス派の人々の Entzauberung は、さしあたり、このように現実世界を神々の人間的な振る舞いから解釈することを止めること、即ち、擬人的世界解釈を厭離することから始まった。(この擬人的世界解釈をはっきりと嘲笑したのは、ミレトス学派の後に続くエレア学派のクセノファネスである。)しかし実は

Entzauberung の射程は、単に擬人的世界解釈からの
 厭離にとどまるのではなかった。有るものの全体の頂点
 に必ず何らかの統裁者・中心者を置く「中心化的世界観」
 そのものの忌避にまで、それは達して行くことになる。

では彼らの批判の射程にある「中心化的世界観」とは
 具体的にどのようなものであるか。

2) 創世記における中心化

「中心化的世界観」の頂点に設定されるのは、もちろ
 んゼウスばかりではない。神の言葉（ロゴス）もこの頂
 点に立ち得る。『創世記』はこの事情を次のように語っ
 ている。

「神は、『光あれ』といわれた。すると光があった。神
 はその光を見て、良しとされた。神はその光と闇とを分
 けられた。神は光を昼と名付け、闇を夜と名付けられた。
 夕となり、また朝となった、第一日である。」(『創世記』
 1・3-5)

ここには神が文字通り「思い」のままに世界を作り上
 げていくその第一歩が記されている。神はその「言葉」
 (ロゴス)によってまず光を創る。光とは即ち広がりとし
 ての空間である。空間の創造に続いて、神は昼と夜を
 即ち時間を創って行く。こうして神はさらに天空と大地
 と大海を創った後、いよいよ生命を、植物、魚類、鳥類
 を創造していく。

「大地は青草と、『種類』に従って種を持つ草と、『種類』
 に従って種のある実を結ぶ木とを是を生えさせた(同上1・
 12)。…神は海の大なる獣と、水に群がるすべての生き
 物とを、『種類』に従って創造し、また翼のあるすべての
 鳥を『種類』に従って創造された。」(同上1・21)(『』
 は筆者)

こうして神は、有るものすべてをその思惟するところ
 の独自の個有な「種類」に従って「思い」のままに
 創りあげる。神の思惟、神の言葉は全存在者の範型とな
 るのである。(この「種類」が後にプラトンにおいては、
 「アイデア」といわれるものになると私は思う。)そしてつ
 いに創造最終の日の6日目に、神はまたこう語る。

「我々にかたどって人を創り、これに海の魚と、空の
 鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うも
 のとを治めさせよう。…産めよ、ふえよ、地に満ちよ、
 地を従わせよ。また海の魚と、地の鳥と、地に動くすべ
 てのものごとを治めよ。」(同上1・27-28)

ここには典型的は「神人同型説」が語られている。人

は神を範型として創られ、それ故に世界の自性的根本原
 因である神に最も近いものとして被造物中の最高位に位
 置し、その地点からすべての存在者を統一的に観照し統
 治する視点を与えられる。創造主である神に代わり、今
 や人がすべての他の被造物を支配するものとなる。まさ
 にアドルノとホルクハイマーが言うように、「神人同型説
 は現在を統べる主権、支配者のまなざし、命令権のうち
 に成り立つ。」(『啓蒙の弁証法』徳永恂訳 岩波書店10頁)
 のである。

「中心化的世界観」の頂点に位置するのはゼウスであ
 ってもよいし、創造主としての神であってもよい。重要な
 のはその中心点、存在者の存在可能根拠=根本原因であ
 るとともに、あたかも刑務所の中央に建つ監視塔のよう
 に、そこからしてすべての存在者の有様を監視すること
 ののできるポジションだということである。中心点はす
 べての存在者の存在可能根拠であると同時に、それによ
 って存在せしめられている全存在者を見渡し監視すること
 ののできる認識可能根拠であるという両義性を持つ。この
 ことを最もはっきり示したのが、プラトンであった。

3) プラトンにおける中心化

プラトンは「善のアイデア」を世界の中心点として設定
 したが、これが上記の両義性を持つことを彼は次のよう
 にはっきりと語っている。

まず第一に善のアイデアが存在者の認識可能根拠となる
 ことをプラトンは次のように言う。

「認識される対象にはアレティア(真理性・隠れなさ)
 を提供し、認識する主体には認識機能を提供するものが、
 善のアイデアである。」(プラトン『国家』第6巻 508,e)

そしてさらに第二にプラトンは、中心点としての善の
 アイデアが存在者の存在可能根拠ともなることを次のよう
 に語る。

「認識の対象となる諸々のものにとっても、ただその
 認識されるということが善によって確保されるだけでな
 く、さらに有るというその実在性もまた、善によってこ
 そそれらのものにそなわらうようになる。」(同上 509,b)

要するに全存在者の存在と認識の両方の可能性は善の
 アイデアに依っており、したがって、他の何ものにも依拠
 せず完全に自立し自性的に有るのは、善のアイデアのみで
 ある。それは宇宙の中心にあって光を生みつつ全てのもの
 を成長させる太陽の力に等しい。

「太陽が視覚の原因であり、また事物が光のうちに見

られることの原因であるのみならず、万物が成長することの原因でもあるように、善は魂にとって認識の原因となるのみならず、認識の対象であるすべてのものに真理と存在を与える力と美をもっている。そしてまた太陽が、それ自身は視覚でもなければ見られるものでもなく、それらを超越しており、両者は善自体ではなく、善の性質を持っているにすぎない。」(同上)

『創世記』が人を神の似姿として設定し、したがって全存在者のうちで神にもっとも近い特権的ポジションを人に与えたように、プラトンは「哲人」に善のアイデアにもっとも接近する特権を付与する。彼の「洞窟の比喻」と「魂の三分説」を併せもって言えば、生まれてからこの方洞窟の底に縛られて壁に映る影のみを真実と見なしている囚人は、「欲求」の魂の担い手であり、ひとたび縛めをほどかれて洞窟の底に燃える炎を見つめることのできる人は、「気概」の魂の担い手である。そして困難なパイディア(陶冶)の道を登りつめて洞窟の外に立ち太陽の光を浴びてアイデアの世界を見る人こそが「理性」の魂の担い手である。それら三つの魂はそれぞれ人間の「腹」と「胸」と「頭」に喩えられ、あるいは「生産者」と「戦士」と「哲人」に喩えられている。そしてプラトンにあっては言うまでもなく、「哲人」こそが王でなければならない。支配者でなければならない。何となれば彼こそが全ての存在者の真実の有様を、つまりはアイデアを見ることが出来るからである。かくして見ることは支配することとなる。ベーコンの「知は力なり」は、ここにすでに確定していた。

もちろんミレトス学派の人々はプラトンを知る由もなかったが、彼らが脱神話的思考態度(Entzauberung)を取ったということは、世界は何ら中心となるものを持たないと考えたことであり、したがって中心者へ最接近するという特権的ポジションの設定を間違いだとしたことである。その意味で彼らの脱神話の射程はプラトンの否定にまで及んでいると言ってよい。そしてハイデガーに倣って言えば、プラトンからニーチェに至るヨーロッパの形而上学の歴史そのものの否定にまで、彼らの射程は届くはずである。今は一つ一つ列挙はしないが、ヨーロッパ形而上学は常に何らかの形で世界の中心者を設定してきたからである。

このような「中心化的世界観」は、ではどこに由来するのか、まずはギリシャ神話に目を向けてみよう。

4) ギリシャ神話における中心化

前8世紀の詩人・ヘシオドスの『神統記』(テオゴニア)によると、原初、無限の空間カオス(混沌)があった。このカオスから大地の女神ガイアと闇エレボスそして夜ニクスが生まれた。そして大地の女神ガイアは天空の男神ウラノスと大洋神ポントスを生んだ。それから彼女は自らの子・天空の男神ウラノスと交わり、後に時間を司ることになるクロノス(「年代記」を意味するchronicleの語はこの神の名に由来する)やレア等々の子供が彼らの間に生まれた。しかし父なる天空の男神ウラノスはこれらの子供を忌み嫌い、母でもあり妻でもある大地の女神ガイアの腹の中に閉じこめてしまったと言われている。これに怒った大地の女神ガイアは息子クロノスに金剛の斧を与え、クロノスはついにこれで父親ウラノスの逸物を切り取ってしまった。(一説には、このとき父親ウラノスの精液がエーゲ海に流れ出し、そこから美の女神ヴィーナスが生まれたとも言われる。ポッティチェルリが描く有名な「ヴィーナスの誕生」である。ちなみにヴィーナスは後に愛(エロス)の神キューピッドを産むことになる。)

こうして宇宙に君臨することになった時の神クロノスは妹レアと交わり、後に黄泉の国を治めることになるハデスや海神となるポセイドン、等々が生まれてくる。ところが時の神クロノスの両親つまり大地の女神ガイアと天空の男神ウラノスは、これらの子供が必ずクロノスを滅ぼすであろうと予言する。そこでクロノスは自分の父・天空の神ウラノスと同様これらの子供たちを恐れ、今度は自ら次々と彼らを飲み込んでしまう。そこで妹にして妻であるレアは、両親(ガイアとウラノス)の薦めに従い、クレタ島の洞窟に隠れて天を治め光を司ることになるゼウスを産んだ。こうして難を逃れたゼウスは成長し、母レアの助けを借りて父クロノスに薬を与え兄弟たちを吐き出させることに成功する。かくして天空の神ゼウスは、その後ヘラ、レト、ディオネ、マイア、セメレといった多くの女神や人間の女たちと交わり、後にヴィーナスの夫となるヘパイストス、戦争の神アレス、月の神ディアナ、弓と予言と音楽の神アポロン、商業と競技の神ヘルメス、酒の神ディオニソス(バッカス)等々を次々と生んで、ギリシャの最高神となるのである。

ヘシオドスによって語られるギリシャの神々の系譜は もちろんもっと詳細にして複雑だが、要するにそれは、

子が父を抹消せんとする物語であると言ってよい。クロノスは父ウラノスを抹消しようとし、ゼウスも父クロノスを抹消しようとしているからである。ということは即ち、ゼウスによる宇宙の最高ポジションの最終獲得は、自己の出自の抹消によってなされているということである。彼らの出自の最高にして最終のポイントは、ではどこにあったか。それはいうまでもなくカオスにある。ゼウスは結局このカオスを消すことによって宇宙の最高ポジションを獲得した。

カオスはもちろん「混沌」と訳されるが、それは日本の『古事記』に語られる最高神としての「もはや名付けられぬ神」と言ってもよい。「混沌」とは結局、「もはや名付けられぬもの」と同義であるからである。

古事記において産巢日の神も天照大神もこの「もはや名付けられぬ神」と呼ばれる最高神に仕える神であった。有るものが必ず何らか名付けられて有るとすれば、「名付けられぬもの」はもはや有らぬもの、つまりは「無」である。日本の神話はこの「無」を最高のポジションに置いて、それを決して抹消しようとはしなかった。ということは日本の神話は天皇制の構築をもちろん意図してはいても、最高のポジションは実は「無い」としたのである。世界の三角錐の頂点は実は突き抜けて、スルーになっているとしたのである。（拙著『日本文化の基調』文化書房博文社参照）

ギリシャ神話はこの最高ポジションの無化を拒絶した。彼らにとって最高ポジションは、有らねばならぬものであった。彼ら自身が最高のポジションに立って常に他民族を支配しなければならなかったからである。その支配の姿勢は、ギリシャ民族がアリア系民族に由来するという綿々たる過去の歴史から生じていた。アリア系民族とは、ではどのような人々であったのか。

5) パラモン教における中心化

おおよそ前3000年頃、肌の色白く目鼻立ちの整った人々が、東ヨーロッパから中央アジアの草原地帯に住んでいた。彼らは自らをアリア（高貴）と称していたが、人口増加あるいは気候変動のために、前2000年頃四方に分散、移動を開始したらしい。そしてその一部はシリア、パレスチナ、メソポタミア方面に進出し、そこを支配して王国を築いた。またアリア人はギリシャの地にも進出し、これがヨーロッパ人の祖先となった。このようなアリア人の移動と侵略の歴史を背景として、ゼウスを

世界の中心とするギリシャ神話は作り出されたのだった。

あるいはさらにペルシャ地方に移住したアリア人は、イラン民族の祖先ともなった。ここでは後に述べるゾロアスターが生まれてくる。そしてさらにアリア人たちはゾロアスターを産んだペルシャからアフガニスタンを経て、パンジャブ地方に移住した。これがインド・アリア人である。彼らは肌黒く鼻の低い先住のドラヴィダ人やムンダー人をダーサもしくはダユスと呼び、黒色無鼻の悪魔と見なして、インダス文明を破壊し先住民を奴隷（シュードラ）とし、自らはカースト制度の頂点であるバラモンの位置に立った。

このようにギリシャ人とペルシャ人そしてインド人はその祖先を同じくしており、彼らが信奉する神々の中に同じ名前が見いだされるのはこのためである。

まずギリシャの神ゼウスは、インドに全く同名の神として見いだされる。ゼウスの名は古くは Dieus と発音され、この名はインド・アリア人たちが最高神として崇め、バラモン教の聖典『ヴェーダ』にしばしば登場する天の神ディヤウス（Dyaus）と同名である。ギリシャの最高神ゼウスは、そのままインドの最高神ディヤウスであった。

ディヤウスの名前が盛んに登場する『ヴェーダ』とは『リグ・ヴェーダ』を中心とする4種の「本集」（サンヒター）を総称するものだが、このサンヒターが作られたのはおおよそ前1500年から前1000年にかけてのことと考えられている。そしてその後、前1000年から前500年くらいにかけて、サンヒターの付属文献である『アーラニヤカ』、『ブラーフマナ』、『ウパニッシュッド』が成立してくる。しかるにこれらの成立にとまって様々な神の神格に盛衰の跡が見られ、ディヤウスは次第にその最高神としての地位を失い、代わってプラジャーパティという神が世界の創造神として最高の地位に就く。プラジャーパティは宇宙卵から生まれ、この神が天空と大地そして神々や悪鬼を創造したとされる。しかしこのプラジャーパティもまた次第にその神格を失い、ウパニッシュッド時代になるとブラフマン（brahman・梵）と同一視され、ブラフマンの単なる呼称にすぎなくなる。

このように前1500年から前500年にかけての約1000年の間に、世界の最高創造神はディヤウスからプラジャーパティへ、そしてプラジャーパティからブラフマンへと交代した。この最高創造神の変遷は、侵入したアリア人のもたらした初期のヴェーダを中心とするバラモン教

が、ドラヴィダ人等の持っていた土着の宗教と徐々に混交していったことを物語っている。あるいはこの変遷を、ヴェーダを中心とするバラモン教が土着化してヒンズー教となったと言ってもよい。

以上のように最高創造神の変遷はあるものの、ここでは一貫して世界を創造する世界の中心点が置かれていたことは明らかである。そして世界には中心点があるというこの考え方は、ウパニシャッド哲学において非常にはっきりと打ち出されている。

ウパニシャッドの哲学者たちは、生成変化する経験的現象世界が何を根本原因として生じてくるのかということ考えた。そして彼らは変化する現象世界の根底にそれを生ぜしめる根元的な力を想定したのである。それが、ブラフマンであった。ブラフマンとはそもそも諸神万物を背後から突き動かす神秘的威力を意味していた。この力に依存して初めて生成変化する全ての存在者が存在している。したがってこのブラフマンのみが「自存者」であり、完全な「自性者」である。

この神秘的威力は諸処のヴェーダのマントラ（賛歌、祭祀、呪文、真言）のうちに顕現すると考えられた。つまり祭式の際の言葉が、宇宙の根源力と不思議な繋がりを持つと考えられたのである。この時代にあっては、言葉と実在との間に何らかの観念連合が見いだされさえすれば、両者は直ちに同一なのであった。原型の類似も模写も直ちに原型と同一であった。Lévy-Bruhlが未開人の表象の仕方を示すために用いた用語で言えば、「融即理法」(loi de participation)である。

さらに、この宇宙の根源力とマントラが同一視されると、このマントラを語るバラモン自身のうちに宇宙の根源力が潜んでいると見なされるようになる。生成変化する世界の有様はこうして、バラモンの語るマントラによって支配されることになる。つまりは人間の幸不幸もまた、祭式によって左右されるのである。かくしてバラモンは「人間的神」となる。

ところでウパニシャッド (Upa-ni-ṣad) とはそもそも「近くに座る」、「近侍する」という意味である。そこから互いに近くに座る師と弟子とのあいだで秘密裏に口伝された「秘義・奥義」を意味するようになった。しかしこれまで私たちが中心化的世界観について考えてきたところからすれば、「近く」とは世界の中心者への最接近を意味すると解することもできよう。バラモンとはまさにこの最接近の特権的ポジションに座る人であった。

ミレトレス学派の人々がギリシャ神話に対しアンチの旗を掲げたように、仏陀はこのバラモンの神話に対し、つまりはウパニシャッドの哲学に対し果敢に戦いを挑んだのである。一人特権的ポジションに座るバラモンを許すことは、結局奴隷(シュードラ)の存在を許すことになるからである。そして何よりも世界に中心点を指定することが、根本の「無明」であり、「罣礙」であるからである。世界には何らの中心もなく、したがって中心点からの遠近もなく、「無罣礙」であって、それ故すべて存在するものは完全に同質であり、したがって完全に平等であると、仏陀は認識していた。この「智慧」にこそ、真の「慈悲」が成り立つことを仏陀は知っていた。

6) ゾロアスターとピタゴラス及びプラトンの関係

ギリシャの神ゼウスは『ヴェーダ』に登場する最高神ディヤウスと同名であったが、ペルシャの太陽神ミトラ Mithra もまた、『ヴェーダ』神話に語られる太陽神ミトラ (Mitra) と語源を同じくしている。このようにイランとインドが同一名の神を戴いているということは、すでに見たように、アーリア人がイランの地を經ておおよそ前1500年頃パンジャブ地方に進出する以前に、イラン・インド共同時代があって、共通の太陽神が信仰されていたことを物語っている。

ペルシャのミトラ神はそもそも天空を司る神として信奉されていたが、前3世紀ころ次第に太陽の神、万物豊穡の神として信仰され、独自のミトラ教を形成するようになった。しかしミトラ神は教義の上では、ペルシャの偉大な予言者とも占星術者ともまた魔術者とも言われるゾロアスター (Zarathustra) (英語名 Zoroaster) を教祖とするゾロアスター教の中に位置づけられている。

ゾロアスターは30歳の時初めて神の啓示を得、それから10年の間に7度神と対話したと伝えられている。そのとき聞いたとされる神の言葉を記したものが、聖典『ゼンド・アヴェスタ』(Zend-Avesta) である。

それにしてもゾロアスターが神と対話したというのはいつ頃のことであろうか。彼の生没年代は諸説紛々として秘密に包まれている。

前6世紀末頃の小アジアはエーゲ海に面するイオニアの地リュディアの国の人クサントスによると、ゾロアスターは第3回ペルシャ戦争(前480年)にさかのぼること約6000年前の人であったといわれている。そしてまたAD79年のヴェスビオス火山の噴火に巻き込まれて死ん

だ博物学者プリニウスは、エウドクソスの説として、ゾロアスターが生きていたのはプラトンの死（前347年）よりも6000年以前のことであると記している。（プリニウス『博物誌』30.21.1）（ちなみにプリニウスが引用しているエウドクソスなる人物は、プラトンに学びながら彼に「東方の叡知」を教え、失われた著作『世界周遊記』を残したと言われる。）

ゾロアスター教神学によると、人類の歴史は「創造」と「混合」と「分離」がそれぞれ1000年続いて、これが一つの「世界年」となる。つまり世界年は3000年である。世界は3000年周期で一巡し、新たな世界年がまた始まると考えられている。つまりゾロアスターにおいては世界は輪廻するのである。そこで上にあげた6000年という数字は、この世界年の倍数であろうと考えられる。

では彼は真実のところいったいいつ頃の人であったのか。

伝承によるとゾロアスター教の聖典『アヴェスタ』は、万物と天則を創造した神アフラ・マズダー（アフラ=いっさいを知り給う・マズダー=王）によってつくられ、この創造神アフラ・マズダーによって予言者と認められたゾロアスターがウイシュタースパ王のもとに贈ったものと言われている。ウイシュタースパ王は金文字で『アヴェスタ』の写本をつくり、ペルセポリスとサマルカンドに送ったが、前330年アレクサンダー大王によってアケメネス朝ペルシャが滅ぼされたとき一書は灰燼に帰し、一書は略奪されてしまったと言われる。

ここで語られるウイシュタースパ王というのは、これまた伝承によるとアレクサンダー大王（前356～323）に先立つ258年前にゾロアスターに帰依したとされる人物で、アケメネス朝のダリウス大王（在位前522～486）の父とも考えられるあるいは同名の別人かもしれない。かくしてゾロアスターの生年を確定できるものはこのウイシュタースパ王しかなく、これをもとにする限りゾロアスターは前7世紀の人ということになる。

ともかく前7世紀のいつ頃かゾロアスターは、いっさいを知り給う全知全能の神=アフラ・マズダーと語り合った。聖典『ゼンド・アヴェスタ』（Zend・Avesta）は、そのときの様子を次のように伝えている。

ゾロアスターは、創造神アフラ・マズダーによって最初に創造された大天使ワフマン（ウオフ・マフナ=善き意図）に導かれ、今、最高神アフラ・マズダーの前に立っている。ゾロアスターはアフラ・マズダーに問い尋ねる。

誰が生みの親か、誰がアシャー（天則・正義）の初めの父か、誰が太陽と星の道筋を決めたのか、誰が天空を落ちぬように支えているのか、誰がワフマン（ウオフ・マフナ=善き意図）を創造したのか。

創造神アフラ・マズダーは次のように答える。

「ゾロアスターよ、生みの親は我なり。アシャー（天則・正義）の父にして養い親は我なり。太陽と星辰の軌道を造りしもの我なり。月の満ち欠けを知りしもの我なり。……ゾロアスターよ、世界中の被造物をワフマン（ウオフ・マフナ=よき意図）を通して造りしは我なり。」（前田耕作『宗祖ゾロアスター』ちくま書房 第3章参照）

ここでは世界を創造する世界の中心点が、アフラ・マズダーという神であることが述べられている。アフラ・マズダーが最初にワフマン（善）を造り、このワフマン（善）の意思のもとに天地の万物を創造し、それら万物が則るべき宇宙の秩序（アシャー・天則）を定めたと言われている。

全知全能の神王=アフラ・マズダーとの対話が始まってから10年、40歳のゾロアスターはついに自らの命を供物としてアフラ・マズダーに捧げることを誓い、宣教の旅に出た。そして2年後に出会ったのが、前述のウイシュタースパ王である。このときゾロアスターは、酒と香と石榴と牛乳を4人の人に与えた。ウイシュタースパ王は酒を飲んで三日間眠り続け、その間王の魂は清浄なる他界を見た。香をもらった人は現在と未来の全てを知る能力を得、石榴を食べたものは不死身の青銅に似た強き人となり、そして牛乳を飲んだものは不死の体となった。

この物語を見れば誰でも、すぐに前述のプラトンの魂の三分節を思い起こすだろう。酒を飲んで清浄なる他界を見た王と香をもらって全知の能力を備えたものは、プラトンで言えば、善のアイデアを象徴する太陽の光を浴びて全ての真実を知ることのできる「哲人」に他ならない。青銅のごとき体はもちろん戦士に該当する。牛乳を飲んだものは生産者である。そもそもプラトンが「善のアイデア」を世界の中心に設定したということ自体が、ゾロアスターからの影響ではなかったか。アフラ・マズダーがまず最初にワフマン（善）を造り、このワフマンを通してアシャー（宇宙秩序・天則）を定めたというゾロアスターの教えは、そっくりそのままプラトンのアイデア論の骨格となったのではないか。

よく知られているようにプラトンは、前390年から388年にかけてエジプト旅行を行い、ピタゴラス（前570～

496)の思想と出会った。そのピタゴラスはオルフェウス教に由来する霊肉二元論の立場に立ちながら、「数」をすべての存在者の存在可能根拠としていた。つまり彼以前のミレトス学派の人々が世界を構成する根本質料(アルケー)を問題としていたのに反し、規定するものとしての「形相」という観念をピタゴラスは初めて打ち出していたのだった。

ピタゴラスを知ったプラトンは、ピタゴラスの数的形相の観念を「イデア」としてとらえ直していく。さらに彼はピタゴラスのオルフェウスの霊肉二元論を感覚世界と思惟世界の二元論へと、つまりは洞窟の底に燃える炎の世界と洞窟の外の太陽の光の世界へと練り直していく。エジプト旅行で知ったピタゴラスの思想は、プラトン哲学の骨格となった。それほどにエジプト旅行は、彼にとって決定的に重要であった。

ところで実はポルピュリオスによると、そのピタゴラスは「神々への祭儀やその他の生活にまつわるいとなみについて、マゴス僧(呪術師・妖術師)たちに師事し、これらを修得したと言われている。」(『ピュタゴラス伝』6『ソクラテス以前哲学者断片集』岩波207頁)さらにヒッポリュトスは「ピュタゴラスはカルダイアのザラタス(ゾロアスタ)のところへ行った。」と述べている。(『全異端派論駁』I2, 12 [Dox.557] 同上書209頁)とするゾロアスターの考えはピタゴラスに及び、それがプラトンにまで流れ込んだのではないか。

ピタゴラスの霊肉二元論においては、霊は今あたかも墓のうちにるように、肉に縛られ罪を負っている。そこで人は、この肉から解放されるまで贖罪の生活をおくらなければならない。浄化の道を歩まなければならない。様々な禁食、沈黙、悔悛そして放浪と乞食さらに哲学、数学、音楽、体育の訓練を行わなければならない。こうしてついについに霊は肉から解放され純粋な霊そのものとなって、完全に調和した天界の世界に住むことになる。

そしてそのような純粋な霊は、不死なのである。霊は輪廻するからである。それはちょうど天界にきらめく星辰の世界が繰り返し同じところに戻って来るのと同じである。万物は永遠から永遠へと循環している。それが「大宇宙年」である。ピタゴラスは弟子を前に「いつか私は杖を手にして、ふたたびお前たちの前に立ち、お前たちを教えるだろう。」と語ったと言われる。(ヒルシュベルガー『西洋哲学史』I,57頁 理想社)

私たちには「大宇宙年」とか「輪廻」というピタゴラ

スの考えが、すでにゾロアスターの考えていた事柄であることがすぐに分かる。すでに見たようにゾロアスターは1000年単位3回の経巡りを考えていたからである。実にゾロアスター誕生を記す文章に「三番目の3000年の後のいつとはいえぬ時、創造者アフラ・マズダーはゾロアスターのフワルナフ(無量光)を彼の未来の母の胎を経てゾロアスターへと移された。」とある。(前田 前掲書114頁)ゾロアスターにおいては、宇宙は3000年周期で輪廻するのであった。

そして輪廻の思想は、ヴェーダ時代後期に「業」の思想と並んでペルシャへと伝承されたものと思われる。ゾロアスターはこれを継承している。そしてピタゴラスはインドからゾロアスターに至った輪廻思想を受け継いだのであった。実にピタゴラスは「異国人たちの秘義を授けられた。」(擬イアンプリスコ『数理解神学』p.40 Ast 同上書204頁)のである。

さらにアエティウスによると「ピタゴラスは万有を包み込むものをその中にある秩序に基づいてコスモス(秩序体)と名付けた」(『学説誌』II1, 1 [Dox.327.8] 同上書216頁)と言われるが、この「調和する宇宙」(コスモス)という考えは、ゾロアスターの言う創造神アフラ・マズダーによるアシャー(天則・正義)の創造という考えから来ている。アフラ・マズダーは「太陽と星辰に軌道を造りし者」(前出)であった。

そして肉体を靈魂の墓場と見るピタゴラスの霊肉二元論は、オルフェウス教から来ていることは確かだろうが、そのディオニソスの神を祭るオルフェウス教自体が、単純な生の肯定しか知らなかったホメロスの民にとっては全く新たな神話解釈であり、そこには明らかにゾロアスター教の光と闇からなる典型的な二元論が反映している。その光と闇の二元論は次のように語られる。

「初めに二霊ありき。二霊は心と言葉と行為において、より正善なるものと、より邪悪なるものであった。二霊は光と闇となりき。光を選ぶ者は光有る存在に列しられ、闇を選ぶ者は闇なる存在に列しられん。」(前田 前掲書136頁)

光の霊はスタンブ・マンユ(聖霊)といわれ、これは全知全能の神王アフラ・マズダーから生み出された者である。そして一方闇の霊はアラン・マンユ(破壊霊)といわれる。現実の世界は、生をもたらす光輝く聖なる霊と暗黒の死をもたらす破壊の霊との戦いである、この戦いのさなかにあつて闇の霊を折伏する神が、先に述べた

光明神ミスラにはかならない。このミスラ神がヴェーダ神話に登場するインドの太陽神ミトラと同名なのであった。

光明神ミスラに助けられて光の霊を選び取った者は楽の音絶えることのない「讃歌にあふれる家」即ち天国に生まれ、闇の霊を選び取ってしまった者は地獄に墮ち、善悪等しかった者は悲喜のない煉獄に生まれるという。そしておのおのの人間の魂は、自ら選び取ったこれらの場所で3000年を過ごした後ようやく至福の不死に至り、肉体は甦るのである。

このようなゾロアスターの語る二元論は、結局、闇を捨て光へと向かえというものであり、それは肉を捨て霊へと向かえと言ピタゴラスの二元論と基調は同じである。ピタゴラスはこの点でも、ゾロアスターを受け入れたのである。ゾロアスターの二元論と輪廻説そして創造神アフラ・マズダーによるアシャー（宇宙天則）の設定。これらのゾロアスターの教説を、ピタゴラスは全て自説の中に取り込んだ。

そしてプラトンは、ゾロアスターに由来するピタゴラス説をアイデア論として展開したのだった。プラトンにあっては二元論はすでに述べたように感覚世界と思惟世界の二元論となり、創造神アフラ・マズダーの位置には太陽に象徴される善のアイデアが来る。そしてアシャー（宇宙天則）は諸処のアイデアが代行する。魂の輪廻説もまた、プラトンにおいては、死後によりやく完全なアイデア界を直感するという終末論的神話として展開されていることは誰も知るところである。

なるほどプラトンの師はソクラテスであっただろうが、天空へと飛翔せんとするプラトンの情熱をかき立てたものは、ピタゴラスの思想であった。そしてピタゴラスを浄化の道へと歩ませたのは、ゾロアスターなのであった。そのゾロアスターは、世界の創造的中心者アフラ・マズダーの声を聞いていた。かくて「高貴」なるものの亡霊は、プラトン以降綿々と生き続け、全てを支配せんとするニーチェの「権力への意志」(Wille zur Macht)として立ち現れることになる。

7) 結語に変えて

以上私たちは、中心化という思考の形態が創世記やプラトン及びギリシャ神話やバラモン教そしてゾロアスター教においてどのように展開されているかを見てきた。それらは「序」に述べたように、アーリア系思想の古層であった。自らを何らかのかたちで他よりも優れており貴しとする考え方は、これらの古層にすでに十分に現れている。

ヨーロッパ形而上学は、常にこの古層から養分を得てきていた。デカルトもカントもヘーゲルもニーチェも、すべて何らかの意味で自己を貴しとしている。彼らは何らかの形で、インテリゲンチエアのナルシスト的な高踏主義を身にまとっている。

これでは救われないものがいるのである。彼らの誇り高き自尊の心では、勇気づけられることのできないものがいるのである。そもそもそこには、愛がないからである。マリアの微笑みがそこにはない。弥勒の微笑がそこにはない。阿弥陀の慈悲が欠けている。

この慈悲を本当に心で感じるためには、いっさいの「自尊」の思いを捨てねばならないのである。「名利」の思いは、いっさい捨て切らねばならないのである。

親鸞は「愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑す。恥ずべし、傷むべし。」と言った。この傷ましくも恥ずべき事態を、一刻も早く去らねばならないのである。善導は「いざ去なん。魔境にはとどまるべからず。」と言った。

本論は「自尊」の神話から去ろうとする準備をなしたのである。いよいよ、いっさいの自性者は無いこと、すべては無自性でありその意味でいっさいは空であり、本来人間の心は「無罣礙」であることを積極的に示すべきである。いざ去なん。